



拾遺和歌集卷第一

春

拾遺集天安七年九月言天乃子能京拾遺舍内様々に御到喜す後源守之文并  
到着御所當居間裏一應願到候般守之文并

三木政光子信傳

平生の家のか合ふゆき

壬生忠峯

春

春とて以ひまくらやみ吉野と山と庭と朝ひとゆく  
年年四年中とてかがりしゆうめの山廬風の秋

紀文幹

春

春とてうとうとしある年の年はすうとゆくうと学  
アヒトとよとゆく

ふ色赤人

紀文

年とて春とてうとうと山とやまとく  
冷泉院東とてかがりしゆうめのあをきてか  
そらきとく

源童之

万十吉信者本  
源童之信傳

吉野山 華やかに香つ満てと相ひ萬のえりうど  
延喜御時月次の御席ゆり

後醍醐天皇

賀茂彦根守

素性法師

新玉乃年三の御行より持てしもの御席ゆり

天慶御時御合

源頃

力田加奈子五位

ゆにこまくね事の谷風すよとすの御席

頃

足利義詮

力田加奈子五位

事までひめの事の谷風すよとすの御席

卷之三

毛利の以來かの後をに梅若三吉をもとおもてつてゐる  
事  
あとよりはまほまんとの品の鞆の原をもとおもてゐる  
事  
恒佐古大吉の家屋風景  
人唐  
景

人言

四月二十三日  
晴  
午後一時半  
風雨  
未時止  
晴  
夜半  
風雨  
未時止  
晴

春日壁にわの年つはよとをぬのひみの家也久  
中都東生移居時 中都東中移居時  
金子とて御様ゆきまつり 金子

（中略）

ちやがよしるしゆうじの日初生の日は人まつらを  
木のよけの木の木と種神木の日は人まつらを

類

宋少之集

入之武教令乃子孫也（傳所引）

大中隱居錄

月夜の梅の花の香り

梅の名前をちりめんのひめの花と云ふ。別名もあつた。

後人之次

梅の雪の下に立つて見ゆるはうすい

朝まであまくうとうける梅の花が春の元氣ばかりだ

晴風と何がいいと薄毛の心地の良さを、髪の生えかたの良さ

大中臣能宣

匂ひと風まよひ梅の色あすか風まよひす  
すもすきに風のすきむち柳の色あすくすきの  
人の色えすきの

うきてを色も語る音柳の色がりてそらへゆる  
扇風

う柳の色がりてそらへゆる風を呼ぶ掌内を立  
扇

運情とやへ一 立えよむきてひよむ柳の色のよよどる人竹  
ふよけりあきてはなはあひよどりゆ

咲ひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

吉野山絶え盡の柏門人よきぬるやまくじ森

あくはく

天禧九年丙寅立合  
咲ひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

讀人 葉種

かののひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

吉野山絶え盡の柏門人よきぬるやまくじ森

葉種

かののひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

吉野山絶え盡の柏門人よきぬるやまくじ森

葉種

吉野山絶え盡の柏門人よきぬるやまくじ森

葉種

天禧丙寅立合  
咲ひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

葉種

かののひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

葉種

天禧丙寅立合  
咲ひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

葉種

書年壬辰立合

かののひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

葉種

天禧丙寅立合  
咲ひうらうひに山風かといとさぬる内うれ  
頌

葉種

天香御席ゆ

たせ

春の事みどりをすがるのをめざす  
あはせらひのとく

頃

まことのむちあるて人のうらはせをす

五年中

嘆

五年中嘆

天香宮内侍

春の事みどりをすがるのをめざす

寧相中將故忠相家席ゆ

かみと橋のこゑ古に内者ありこれゆはまわし

御屋簷風よしき人者所

伊勢

まことのむちあるて人のうらはせをす

歌

歌

橋のうき渡さぬ聲くめりしの後つゝき声

をとすけ

天香御席ゆ

たせ

花のあと植まく春の種たねが都みやこを絶きて以よ人ひとを失うしなじ

歌

歌

橋のうき渡さぬ聲くめりしの後つゝき声

をとすけ

天香御席ゆ

たせ

身よろてらむ野のと野のい草くさの落おち内うち事こと社しゃあき

歌

歌

天香御席ゆ

たせ

古ふるよりあらじけり原はらの草くさの落おちや春はるをくづき声

歌

歌

天香御席ゆ

たせ

あぬあぬよもやすうねのの小こ春はるをくづき声

歌

歌

はきぬとひよるは様をつゝ人こそやめや集の所

席風

乃ぬ

あそぶふとてゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

あそぶふとてゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

歌

源信院

山の里をひのくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

朝海

夜の御時花はなにのせ脚あ会の歌

源信院

源信院

朝海

夜の御時花はなにのせ脚あ会の歌

真子院の奇合

坂上是則

花の色と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
花の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく  
春の香と山の緑と後山まづはのやもやみゆく

拾生和奇集卷第二

夏

大中臣能宣

天香の雨時奇合

大中臣能宣

天香の雨時奇合

大中臣能宣

天香の雨時奇合

大中臣能宣

天香の雨時奇合

大中臣能宣

天香の雨時奇合

大中臣能宣

学の春候物の物は、いとむかへてそぞくを多けり  
在在済時犯を含みて、萬の意乃高極もの

小野宮大政大臣

詩書うるがまて、嘗る者のみよし、  
即ち、  
詠歌

あらぬもて、物もいそく、萬の意、廣きは波を、  
因よの海の、萬の意、  
魚の浦の、そと、自ら、海浪と、まづて、ゆん、ぬ、人、まろ、  
山里の、御、意、  
御の、意、  
梅、よまく、て、や、暮、の、詠、の、學、内、

詠歌

漢人

うの、意、  
詠歌

詠歌

漢人

は、ゆ

神、まつる、萬の御の、意、  
御の、意、  
詠歌

詠歌

漢人

山城の臣の、よき、御、意、  
時、ゆき、の、よき、御、意、  
春の、よき、御、意、  
初、ゆき、御、意、  
甚、山、を、ゆき、  
万十九

詠歌

漢人

山里の、よき、御、意、  
天、候、時、御、意、  
天、候、時、御、意、

詠歌

漢人

山里の、よき、御、意、  
天、候、時、御、意、  
天、候、時、御、意、

詠歌

漢人

詠歌

漢人

事とて取半もやうにる経を嘗めてもあらまつて  
宣和二年因寒融合上

右大將通經母

故人承でゆきをか跡を以まむ山を詠唱ていつる  
廿四のみあは寄合上

坂上足のり

と拂と今以もむほほまつての承をば我のをせせ  
て磨乃御時の歌合上

王見だそ

三白川下水か  
知るをもゆく  
山本とみの  
山本とみの  
山本とみの

妙解とばよしとばよしとばよしとばよしとばよし  
伊勢源氏の歌合上

源公忠朝臣

小室内とよひ風上

りて山路の歌合上

源公忠朝臣

敷石相合の歌の序曲上

源公忠朝臣

吟里上

いわく今がねてとおあらそとせん

之古御門の歌合上

源公忠朝臣

各自の歌合上

源公忠朝臣

扇風上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

西行の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

西行の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

西行の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

西行の歌合上

源公忠朝臣

あまくさかあまくさかあまくさか

柳家の法子の歌合上

源公忠朝臣

十六卷第一回と

さく文家のお会合

三つ

おまかせのうきよのうりきのひ

五

歌をうきゆるはうきよのうりきのひ

六

歌

歌やうけたまのふの歌みの五月に舞を酒みを

五月雨の紅葉を歌ひ宿泊する夜を経て

七

歌

うて人里そんむ代御うつうすうす秋のうけ

八

歌

夢か寝てゆきおとし人野とまし

九

歌

大伴坂上御女

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

一

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

二

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

三

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

四

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

五

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

六

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

七

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

八

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

九

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十一

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十二

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十三

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十四

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十五

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十六

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十七

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十八

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

十九

歌

歌をうけたまの歌を歌ひて以の歌をぬよゆひ

二十

歌

あく處

古今  
うきよのまつり  
すなはちまつり  
すなはちまつり

和体  
れきのまつり

都は嘗てはる様子故人のうじのまつり

年を過ぐる  
すなはちまつり

和体  
れきのまつり

都は嘗てはる様子故人のうじのまつり

伊勢物語

うこも嘗てはる様子故人のうじのまつり

和体  
れきのまつり

都は嘗てはる様子故人のうじのまつり

伊勢物語

和体  
れきのまつり

都は嘗てはる様子故人のうじのまつり

伊勢物語

## 拾遺和歌集卷第三

秋

秋のそめは清條

内あにき

立てぬまことくすゑのい

内あにき

新刊の序文  
西子

元治二年

物語の本内にあり、あはれ門の事、流の事、船の事

歌

柿本人麿

あはれの門をさへうるゝ事も君うへては年々能まつて

草人

門の邊のうらうへ浦風ぬむと春を以て

草人

まよあててその川をうらふ物とふゆをもくす

本朝文庫  
小野友也著  
修政史通志  
云臣友也著  
清林堂主著  
本朝文庫  
小野友也著  
修政史通志  
云臣友也著  
清林堂主著

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

乃姫

ゆ即花自ふけりにむづきらひあやめ竹舞

歌一

漫人ちに

わがの御近侍はすくめうるまうと人をうかく  
歌風よ前歌ほりこまくとて

花原長能

年後花自ふけりにむづきらひあやめ竹舞

田翁

うとあくねやねふとくも音風よちあ浦

角計歌の事ありと譜はるよ

惠慶法師

萩のそりあをく私主にすこすのみあくとん

美波原風

皆すとく風うせりや林の歌う風う風う田も多ぬ

歌

梅の聲の歌う風う歌う風う歌う風う人よあらわ

紀貫之

うとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

喝威院の御風

あやめうとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

皆すとく風うせりや林の歌う風う風う田も多ぬ

亭玉渡の歌う風う歌う風う歌う風う人よあらわ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

伊勢

梅の聲の歌う風う歌う風う歌う風う人よあらわ

影

謡人

うとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

御威院の御風

あやめうとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

皆すとく風うせりや林の歌う風う風う田も多ぬ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

伊勢

梅の聲の歌う風う歌う風う歌う風う人よあらわ

所

日久治

うとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

御威院の御風

あやめうとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

皆すとく風うせりや林の歌う風う風う田も多ぬ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

伊勢

梅の聲の歌う風う歌う風う歌う風う人よあらわ

所

本居宣長  
文庫

水玉月のうきは

さく

水玉月のうきは  
源景内

源景内

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

水玉月のうきは  
源景内

源景内

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

大喜

水玉月のうきは  
源景内

大喜

大喜

御宿の事よりてあきらめの間はもつて閑と國と

歌 *仙翁* へに まほしきものいぢりをうけう本

長月のうめどまほむうれいのいぢりをうけう本

君大將定國事の爲ゆ *大將* たゞよ

みをがくさのいき方をゆ *山* のまたまの色ゆ

風 *風* まかづくふうのゆうすけのひ葉の色ゆ

秋在浦時々原風 *秋在浦* 中化 *原風*

神 *神* そしのみむろれい成るくわひ *曾根好忠*

歌 *古浦* 大中佐能吉

紅紫正ね花壁乃ふ雲の能事もやがとこくらむしん

まちせぬこのふすも麻の葉の色ゆ

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

朝もすれまゆくはくはく伊保山のとくすううつあつや

朝もすれまゆくはくはく伊保山のとくすううつあつや

まちの色とくきてあらはゆ満くよまく山河乃水

大井川のゆうりくくよく渡侍に

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

秋風を最もくあつゝ風すにり方をもとまの風

名と云ひす。かくかきゆく秋色絶りのゆ

東山にさうりてゆりてありけり。はてま

づゆて讀ゆる。 あらわし

まづすりてゆるをもとめし。すみれ

天香寺御子のとおひがみ。大井山にま

まづ

源光朝臣大納言

まづ

まづ

枝をとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

河をとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

ちくにゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

まづとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

水をとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

二重古大山雷田内山里れ障子乃絃の旅人

あらす。

大後三年冬

から

かくかきゆく秋色絶りのゆ

東山にさうりてゆりてありけり。はてま

づゆて讀ゆる。 あらわし

まづ

まづ

枝をとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

河をとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

ちくにゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

まづとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

水をとゆてゆてゆてゆてゆてゆてゆて

二重古大山雷田内山里れ障子乃絃の旅人

あらす。

始之方也。雖有小山，但其勢不若大山也。故名之曰  
大升門。此門之北，則有新之稱也。  
壬生忠峯

此處之水皆為井水，其味甘美，人多飲之。

清息

此書之傳之久遠也

おおきな手紙を書いた。その手紙は、おおきな手紙を書いた。その手紙は、おおきな手紙を書いた。

拾遺文集卷之四

卷之三

延喜御時内侍のうえと賀の屋風

卷之三

東方子  
清風月夜  
人情事

字典の序

卷之三

神

アセニ  
スニシキハタニ

孫人曇

柿本人麿

紀異

新編 江戸の文書

おまかで御葉をいへ、唐絵の本とおもひやうり  
お風景

卷之三

はの國の事小林の事は中止

卷之三

卷之三

小島のひよし  
六月の朝と  
夜と二度と三度とてゆへきちゆゑをひよしのあやまつん

行費行費  
の申手

池もあそびに行きまちのまへる  
紀友

「中華人民共和國憲法」

宋子京  
老林堂主題  
所作詩  
有此句  
不知其人

人言也

和歌  
かわらけ  
みの風  
まことの風

坂徳公家内屏風

多ういふ風の多ういふ風の事うはまをせせしむるやうあり

まゆのねすも暮れをくわむの内高や音信

秋友則

夕小まほの河内にまよひぬまくでみゆきくち

大林

人ちろ

さとうき島本  
あらんかのあらん  
あらんかのあらん

浦

浦の河内高のまよひぬまくでみゆきくち

庵

庵屋とお陰子

影

傍人

みゆの池の上りゆのまよひぬまくでみゆきくち

日とてとてとてとて

西宮清郎

天の原とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

天の原

庵

庵屋とお陰子

源四郎

伊勢

秋の夜の池のゆのまよひぬまくでみゆきくち

庵

庵屋とお陰子

和歌  
かわらけ  
みの風  
まことの風

藤原佐忠朝臣

だくみ

歌をうたひ

友天帝の年  
年始からいよいよもよろりありの年始はとて  
入通承政室の席ゆ

年始はおのぞきの年始をうけとせばとれとせばとれ

正月の  
室の外の  
室の外の

山里へと移りてまも行かむとくにうきとくに

人まわ

正月の  
室の外の

里のつづきとしとくの枝手繁手をめかまは

人まわ

古木ね定國家

人まわ

白きの冷

人まわ

冷泉院御時事

人まわ

梅うそと

人まわ

拾遺和歌集卷第五

賀

天慶御時赤富士うらわの志長奉還役みて

さうりゆんとす

中納言相忠

翁代のそよ風をかどれも今うけまへ神をさうへ御

ちをて年のあき雪生えしのうゑを北風

大中臣經宣

ようきく

ちをやふるを嘗みねり枝とよきこひそむすらす

仁和院時大嘗會の頃

と義人をひ

の内をよすむねのよとせらるるの數う

贈皇后言のちつぬやのぞ秋よみ詔

年れを

めぞれをほづりて絆もむすてあとつきて

ねる

清原元輔

日がく書道院

のよたうまくよばの日はきゆく色也

益氏のうらわうきうつて

君うんやな翁代とゆきはゆもくきくせりうきう

右大將藤原実資うらわのせりう

平ひよのう

まくのねはせりうかくうそりめをのれとおといれを

ゆく人のうらわうきうつて

とくがく

壬午のうらわゆはくめのゆよほくちと人言以ひ

藤原誠信え股へてはる夜よもとふ

源もくづ

左ねこハおれ正社せくきれ君ハまだせ君ハまだ

三吉すあだゆうくへるる

おとく

紫川在坐の地

ひといじゆく

えゆいじゆく

えゆいじゆく

四十の望が重き

天曆へ三と四十五歳かく一即ちも山陽幸了

本歌  
後ノ事大富を極め盡る字の  
金源事前命経ハ冬と云々傳奏ノ事にて清季故  
官禁事山陽幸了の事也  
幸者御四五年事云々て  
乃と病ふらむゼテすと御事ノ事也  
幸者御四五年事云々て  
乃と病ふらむゼテすと御事ノ事也  
幸者御四五年事云々て  
乃と病ふらむゼテすと御事ノ事也  
幸者御四五年事云々て  
乃と病ふらむゼテすと御事ノ事也

もよそり

山子がひ乃と相うちねうてうれしやまほの御事はる

本歌

後ノ事大富を極め盡る字の  
金源事前命経ハ冬と云々傳奏ノ事にて清季故  
官禁事山陽幸了の事也

幸者御四五年事云々て  
乃と病ふらむゼテすと御事ノ事也

家宮内侍

色之ね葉と竹のまにまにと山のすゑと御  
お前 前と竹の秋とほりて侍り

大中臣頼基

一端 えと代とぞくの枝うみははまつま  
清慎公と十首 侍の竹風

本歌

子とすけ

君う代と何うまうとまきを御の宮ゆくとすくし種ういのには  
青柳乃とまくとめをとくと西 うめくとまくとれまと御めん

本歌

子とすけ

私常は嘗て様のまねうつゆとせみとくとくとせかとく  
かう人七十貫一侍うの竹の枝とはまくと

本歌

君う代と免ま、さる木の枝うみはまくとほきとせぬと御めん  
後ノ事大富を極め盡る字の  
後ノ事大富を極め盡る字の

本歌

子とすけ

喰風うどをのまくとくとくと御と君う代と聲の御事がとすか  
後ノ事大富を極め盡る字の

本歌

子とすけ

君う代とほほむうとくとくと御と君う代と聲の御事がとすか  
後ノ事大富を極め盡る字の

本歌

子とすけ

古原の口傳の智乃賢成部の清貴一傳りをも

文淵閣  
卷之三

伊勢大和守修定

大だよもよしてゐる西宮の事

春の雪入若水をもよおと石をもよおと年と枝ともよおと山林人をもよ  
天祐三年内裏ニシテ乃高せよセウムラニ

九章古文圖

機会をもつておはるゝやうなものは皆を驚か  
ひくに ほんじん

九月三十日  
西王母故事  
事之三十一  
年後  
事之三十一  
年後

康保二年丙辰正月廿日  
子由書於京師

をのこすが、かほくつまへるをぬく  
、信、實

丙子年夏月  
王氏  
著

卷之三

小野宮太政大臣家にて子爵一佐多喜正よりに

三條太政大臣  
行末残存者為舊文

毛喜御時屏風上  
朱子

松と竹と梅と四季の花を題する詩一首

新井の後もあつたが、さうして、

嘉平四年仲夏  
孫子彌叔

卷之三

西後へ思ひをも移す事無く前内神内

三鷹 治  
著者之文也  
小説家其人也

新作より、お花の色をうれいはす。お花の名は、君の名づけ。

廣義の家として人を育む事をせらるゝ事なし

丙申正月乃書於玄鏡堂  
年八十有九

卷之三

ああ、おまえのそばにいるのがうれしい

文正子集

文正子集

古大臣源の元光仁風堂  
さうのあらわのとけすがへはるかに  
ほくしてはなよはる。ほく。ほく。

年数のえりえり。とくとく。ほく。ほく。  
天智御時清慎公内侍。とくとく。とくとく。

もも。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。  
天名。天名。天名。天名。天名。天名。

おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。

伊勢

おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。

君代天ノ羽衣。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。

天代

おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。

## 拾遺和歌集卷第六

### 別旅

作白子今後爲連守同方新羅御内侍無事持此新羅別旅深望

春暮。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。  
おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。おとせ。

伊勢

東後日吉御時  
黒露秋聲

秋露秋聲  
天智御時

天智御時小云命  
天智御時小云命  
天智御時小云命  
天智御時小云命

御製

和歌

立川の里

夜衣に之を身に着けし終日くつむかひといはせ

歌

アモロスの音絃をもる音がまほれ松風吹ふとひそみん  
別てまつはせうそまを御くらすお物とすばしや者もん  
時々かき附く人をあらまへと枝をあらめうあらぬ  
人のもとでゆる人をあらめうあらぬ

天慶御時九月十六日赤富士より作り

脚製

君う代を長因とし思ひば以ひう別て可いう辭  
白事

十月計(うき)うきる人をもん

新古

高さたあくと四(よし)人をもん後(ご)の旅(りゆ)

物(もの)をもん今(いま)まわるむす

のう

あらまほりうる

落葉

別(べつ)語(ご)を學(く)る言(こと)ひを參(さん)廟(びょう)の風(かぜ)をすすむ

落葉

詠(よみ)うる

落葉

あらまほりうるを定(さだ)めまくらしやまくら行(ゆ)くも

落葉

詠(よみ)うる

落葉

後をうのより

ち原 いふ

底ふつてまつた

神をあらわす

五路こうさる鶴を祭りとひでて事ある御

三つの國を守りあらへりにほりはる

はるゆじ

日新にうれしきとおもひてはるはるの君

吾の相臣相臣はてくわりはるよほき内  
をせんうそりにほりはるよほき内  
列をきはいとひそめつゝきくまくまくまく  
天厲序ぬゆりはるよほき内

うやせんと風りかひうるはるよほき内  
かひうるよほき内  
紅葉をそめのうあめのう神乃あけづく神  
か竹あめのうあめのう神乃あけづく神  
列傳をけりよ

女藏人參河

後人

五路のさる祭りとまんぐりわくし神そまんぐりわくし  
源弘景

後人

五路のさる祭りとまんぐりわくし神そまんぐりわくし  
源弘景

後人

おまき者

雜不道

舞

思に十全辨衣

著者

五路のさる祭りとまんぐりわくし神そまんぐりわくし  
源弘景

おまき者

雜不道

舞

思に十全辨衣

著者

有難

とむへまつり  
かくら(まゆるの) ほくま  
おもむきあそぶる處のひからむだまくわゆる、

みちの國のひきえもうまくわづりうるよ漫の  
みのゆで候也

生行事

藤原清正

不毛の地

理無

豊前の雅正、豊前の守、侍冬の為頼る者  
は多くて、うなづくようまなれむる  
侍もす

とくとけ

藤原清正

不毛の地

理無

豊後の雅正、豊前の守、侍冬の為頼る者  
は多くて、うなづくようまなれむる  
侍もす

源滿仲、朝臣  
君は、御承うる事無れまつて、あんとす

上総介

源滿仲

便

實方朝臣さねかた くわうじん まつり侍まつりし よもとくらへ  
みよしのひきだい うきよ

東路とうろ の木き の下した

成な が 級級 の月つき と う い ま せ わ

に ま つ て お は す

に ま つ て お は す

旅たび が 人ひと

宿しゆく が 人ひと

宿しゆく が 人ひと

宿しゆく が 人ひと

潮しお 湾わん 舞まい

舞まい 舞まい

舞まい 舞まい

舞まい 舞まい

舞まい 舞まい

田た 莘むら

田た 莘むら

田た 莘むら

田た 莘むら

古金こきん 鮎上いわせ

宿しゆく が 人ひと

宿しゆく が 人ひと

宿しゆく が 人ひと

宿しゆく が 人ひと

日ひ 葵あ 田た

四百十

は筋の傳そりの

大體  
重病治癒の  
通相傷の送客

贈太政大臣

玉の御

思ひもたれ古の内山を経てゆきあらかじめ之の  
まことに仕て後いかうせて仕る

百八分立金精  
船工徒見前  
船主氣術之に相別  
物事能きより  
作成し候事  
得也画事  
金多ハ日始

君う候事のある事へゆきあらかじめ之の  
ゆきあらかじめ之の事へゆきあらかじめ之の  
船主氣術之に相別  
物事能きより  
作成し候事  
得也画事  
金多ハ日始

波のよきよき少鷺のゆきより見る君う候事で  
あらかじめのほんよきよき少鷺のゆきより見る君う候事で  
人を立候事等事外事前見組上方事唯無事年  
萬事事外事立津事新と應作事七百事のあへ天平八年新羅使事  
万葉前事立津事新羅使事等事立津事新羅使事  
不紀事也

## 拾遺文抄集卷第十七

### 物名

こうふれこと  
五事通有合正候  
引出の度金精  
金多ハ日始

花の色とあらかじめへあらかじめへあらかじめへ  
い石やあらかじめへ

漢人ちしひ  
著事能きより  
作成し候事  
得也画事  
金多ハ日始

五事通有合正候  
引出の度金精  
金多ハ日始

花の色とあらかじめへあらかじめへあらかじめへ  
い石やあらかじめへ

漢人ちしひ  
著事能きより  
作成し候事  
得也画事  
金多ハ日始

五事通有合正候  
引出の度金精  
金多ハ日始

花の色とあらかじめへあらかじめへあらかじめへ  
い石やあらかじめへ

漢人ちしひ  
著事能きより  
作成し候事  
得也画事  
金多ハ日始

劇琴  
一名箏  
又一名

花の色とあらかじめへあらかじめへあらかじめへ  
い石やあらかじめへ

漢人ちしひ  
著事能きより  
作成し候事  
得也画事  
金多ハ日始

石楠草 セキナノハ

セキナノハ

さくあむさ

如夢遊

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

ちもつゆ チモツユ  
漢人 カンジン

うゑて ウエテ  
うゑて ウエテ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

門うま今うちうえ細代 ミタケダ がまくら マクラ かみくら カミクラ

あくのゆう アクノユウ  
あくのゆう アクノユウ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マ克拉

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

常内色 セイナノカラ  
常内色 セイナノカラ

まくら マクラ  
まくら マクラ

さくあむさ

如夢游

元和二年春

わざまくはらひ

かのと内  
重野

萬葉のそよ風  
万葉のそよ風

毛波のそよ風  
毛波のそよ風

山海本吹

かのそよ風  
かのそよ風

水をそよがす

水をそよがす

水をそよがす

水をそよがす

水をそよがす

水をそよがす

よとが

よとが

よとが

よとが

よとが

よとが

古知

古知

古知

古知

古知

古知

丹波のそよ風

古知

大和

大和

大和

大和

大和

初若のそよ風

初若のそよ風

初若のそよ風

初若のそよ風

初若のそよ風

初若のそよ風

初若のそよ風

能用のそよ風

能用のそよ風

能用のそよ風

能用のそよ風

能用のそよ風

能用のそよ風

能用のそよ風

高野のそよ風

標木のそよ風



曰經集改舊可也

本相或用相

さよそひくらめゆひうみはく 索れゆひまくをもし  
さらう すけみ

本ニ子  
本相或用相

さくへい 鮎羽  
さくへい 挑撥也

すけみ

行しすけりゆ  
本相或用相

あくさぬせびけ引網掛  
あくさぬせびけ引網掛  
いほ いほ いほ  
安今後也

くとまうしほのあくさぬせびけ引網掛

すけみ

多きもも  
多きもも

かく置年  
かく置年

あゆ鼠弊  
あゆ鼠弊

すけみ

和名抄  
和名抄

和名抄  
和名抄

あゆ鼠弊  
あゆ鼠弊

すけみ

李子王詒玉堂。丁巳夏月。是夕。如晴方。在。左。解。宿。童。十。古。舍。  
那。食。七。五。日。入。八。月。莫。半。興。二。方。難。難。望。衣。被。各。正。中。仰。方。拂。那。易。二。金。有。  
白。綉。裏。復。大。病。不。容。見。

黑根  
才子

年とて、左をめぐらす。右は、黒根。

日記

久留米の絹といふは、その織物の良さで、古くから有名であつた。

卷之三

同韵

のえども未だ

16

小雪、雨入る。また、夜も夢す也。

一束、赤で、うららか、秋の如き

卷之三

廿九日

拾遺和歌集卷第八

雜

自とえほりく

中務卿吳孟親王

雪

降雪

清竹名庵風

桂

桂

千葉草

千葉草

赤絆月

赤絆月

西若人

西若人

めよかくてはう波とこゆりく

めよかく

大江為基

三重友大寺

法作

法作

翁原元光

翁原元光

つむり

つむり

冷泉後

冷泉後

かくせう

かくせう

翁原仲文

有體の日ひ光とまじりて秋より秋の御  
冬を纏ひ上りめの日行うるやみのまごする

湯本

湯本

細川流

細川流

おもひのゆきなす

おもひのゆきなす

吉田子雲

吉田子雲

翁原仲文

翁原仲文

久松

久松

翁原仲文

左大將 滝時  
侍等

水原をすむ日をうらと源をやれひにする人  
落日の朝の朝の命めんかくとくにほりのうれ

えすけ

年毎の絶好源やはうつみゆはせり有  
急駆院清時落席風みすりつてよれにてす  
きくいふ  
林中納言敷意をせねむ山の源の石と  
ひはるひれ  
御内門主御内門主人のひそとよるうの  
せうひ

中物

君うちもすむ絶好の源が熱てまゆりお物をもる  
歌  
うきゆくも源のゑゑ強そてうきゆの歌の成一解

歌

中化

延喜十三年落度の落席風西帖を仰よりて  
源をもる源のゑゑ強そてうきゆの歌の成一解  
大覺寺の人にへりまへりうりきよくに記  
源とよむ侍る  
古源門落席風  
源のゑゑ強そてうきゆの歌の成一解  
歌手次  
みつ  
おはなとゆうくも喰風湯をすきめりとぞね  
野毛と落中一侍うる松風入在琴と以  
歌と達侍る  
齊宮女御

琴の音にゆき松風歌の歌にはまろそりうきゆの歌  
香風の音うかぎう琴の音をもとまろそりうきゆの歌  
天廣御の名うかぎ所を落中一侍うる松風入在琴と以  
うかぎを落中うきゆの歌とだらう

落中うきゆ春の音うかぎう波の音うきゆの歌と  
更衣清時の西席風うはくゆの歌

正月又子板  
門子うきゆの歌と

西風の吹拂のまゝに波の荒れもまことに

あれ 海賊大井川は紅葉の木々によ哥

よもせりひらう

大井川の内海のりんくちりをや有 亥経

経吉の國の波は内陸の水一絶る玉森

よもせりひらう

あいだにゆきそらはる経吉の雲の木をくはる

五魚の内緒のやうな風の落葉の海を

よもせり

伊勢

海よりみかづれ波音の以をもひばく之有し

物(まくさき)今ぬけづりきらぬおおうだ

鳴れと御

めぐれ波音のきぬうだぬまうじとよせぞ聲

伊勢

の鳴き声をかへて呟田翁の歌がふくらむ

吟人共には

あいづくしてはる人のさうめくまうづく

よもせり

波音の吹拂の清風のわと 河原の邊の古松と清風

源道源

ひまのさうめくまうづく老け松の音

おも人不知

歌

さうて君故多工ひてたまく風葉もくろひ人のを

波音の吹拂の古松と清風

源道源

ひまのさうめくまうづく老け松の音

おも人不知

歌

波音の吹拂の清風の古松と清風のわと 河原の邊の古松と清風

源道源

ひまのさうめくまうづく老け松の音

おも人不知

歌

波音の吹拂の清風の古松と清風のわと 河原の邊の古松と清風

源道源

ひまのさうめくまうづく老け松の音

おも人不知

歌

波音の吹拂の清風の古松と清風のわと 河原の邊の古松と清風

源道源

ひまのさうめくまうづく老け松の音

おも人不知

歌

お多いはけのなすすきうまもて人内まくわほまか  
云

詠集

お集み  
年月日  
風  
天子の御  
おとこ

人をもてにゆる山の山下もよ影ひえは  
ちやうの

伊勢のゆふゆく

生浦伊勢

御のゆみゆすんとくとくあらすじは酒うん  
人をもての酒

天暦十一年九月十五日赤宮天皇即位

御製

天暦十一年九月十五日赤宮天皇即位

赤宮天皇即位

中 菩

年を経てゆるつるまくらむくもくよむくわん  
大武國章こうれをゆくほりをほくとくわん  
て近づくくちゆくくとくとくとく  
赤猿春猿  
紅毛馬をましゆくやくとくあれゆくとくとくとく  
駿とくとく  
うゆくとくとくおこきてはゆくは

中 菩

九重天皇即位

大武國章こうれをゆくほりをほくとくわん  
て近づくくちゆくくとくとくとく  
赤猿春猿  
紅毛馬をましゆくやくとくあれゆくとくとくとく  
駿とくとく  
うゆくとくとくおこきてはゆくは

中 菩

九重天皇即位

おうそをほんじ やげひづる化

おもての命おとめのめいをあはれてるさうおとめのめいをあはれてるさう

神明寺じみょうじのまつりをまうけて侍るまつりをまうけて侍る

そろくそろうれい けすけ

おわが身おわがみの身みをうながす

二条吉太郎にじょうきちたろう左近さこんを佑佑清忠ゆゆきちゆうとてこよまセ

侍るまつるとておのる

のぞい待まつりうるゆうて漢かん思おもひ

侍る

御先君ごせんくんの御先ごせんの御先ごせん

御うそづる年おとめうそづるねをうへて夏なつの處ところをすけ

御先ごせんの御先ごせんの御先ごせんの御先ごせんの御先ごせん

宿主しゆしゅはいきもとでゆきそらのうのから者ものから者ものから

同ひとやよ詮ことうらは人ひとのうらはおもむく

おもむく

源景げんけい唱うた

歌うた

歌うた

おもむく

歌うたとよひ

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

おもむく

歌うたとよひ

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

おもむく

歌うたとよひ

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

おもむく

歌うたとよひ

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

おもむく

歌うたとよひ

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

歌うた

於生於物集卷之九

雜下

あゝ何う事かうつむきをうながす

卷之三

卷之三

元長は主に氣海房のところを春林から請

お方様の御心を以て御仕事なれば、何事も成らぬ

卷之三

急いで渡の上を登り、船を以て走らしめ  
て舟を引き入れた。 大納言朝光忠義を

大明書

卷之三

二

卷之三

卷之三

文  
集

卷之三

卷之三

卷之三

二

言ひておはなすのよし

のをかきとせしるめにまくらうる

みじゆ

めをひき立たてぬてあそびあらわす

みじ

むちひきひきあはれをも思ひもめん

みじ

健守法師伊名のゆゑてゆりゆくゆう  
年といはうある 源氏房朝臣  
文孝天皇  
山崎のゆゑてゆく人形國守  
健守法  
左大將道經母

まことにあはれぬ事、おどろく人をえり

日をとけりて

うつらうらにさわらひをとてうねりてゆき  
ゆきとくらはるをみゆきてまへま  
まへまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

伊勢

車塙 若世用見 宮めの車の門の内浦へや深くを水代へ  
仕合へしてはるくい、森原仲文  
ひどくてもよしとよしとよしとよしとよし

西

すとせむやさん浦やまくらのうる  
庵の御年青藤 松雲 和泉 元 あ

そがれるの前

西宮

経歎の行はるけのままではの國の駒やま

ほのうるけのままでたゞ

経歎のままでたゞのままでせよのまで  
津のまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる  
まゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる  
まゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる  
まゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる  
まゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる  
まゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる  
まゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆるまゆる

通

伊勢 大木行用 伊勢のまゆるみみみみみみ  
まゆるみみみみみみみみみみみみみみみ  
まゆるみみみみみみみみみみみみみみみみ

そのゆゑのまゆるみみみみみみみみみみみ

聲源 行用 やの若

人のゆきとてふる、跡が八年を小袖ぬり也  
不思議者不思議也 三途川  
地獄のゆきとて 七言系通雅母  
云々御事もあらうと思ひて  
羅のゆきとて 三途川  
「三途」海もゆきとて おのづり行もおのづりてゆく  
羅のゆきとて 三途川  
三途のゆきとて おのづりはなみひまの道  
多羅夜とて おのづりいとくもひづり

の御事とあつて、御内帑庫内より也う  
地獄の御事とあつたとて、是吉原通雅母  
海老<sup>えび</sup>と云ふ御事とて、御内帑庫内  
之の御事とあつたとて、はうとひまみ活用  
多角化事とあるうりといふといつて  
をし。

卷之三

卷之三

名を以て身に付くものとしむる  
梅は、いきがれの如きの如きを  
而後の大原川をさうりて下るゝに  
あらきは、萬葉の  
すゆるやかのハ萬葉の御事なる  
ひりゆりやかをもて 仲文  
川柳原のまゝゆりゆりとつまゝあけめぬあらき  
天磨御の一条伊予天磨の御人のまへゆきまゝ常  
おもてゆきの者行その名まづりてゆく  
おもてゆきの者行その名まづりてゆく

季節の御制文  
御制文  
仲文  
伊尹先生  
天磨神明一氣萬物無外人之能者而生焉  
を以て此其所以爲天也  
故曰成物不以爲功と云々

御製  
海潮之聲

あよへてはるどくと  
小河子をゆき

おけで下りて漁舟あらすじの海のあじや

喜びをゆき

大陽氣  
大領子領主領主領主領主

幸子吉野宮之時  
林本朝尼人作歌



御小行

かくのくらげ

ある男れありもひめのひけゆうて年は

とせざつまつてほなよ思はるる

とみ人をいは

まくらふ

おや春日内  
秋山の月夜

まくらふ

秋山の月夜

中とくろい

まくらふ

秋山の月夜

國融院

まくらふ

秋山の月夜

東三条大政大臣



拾遺集卷第十一

神樂ノ奇

たを後悔す。高き達はとくに小ぢる活字を多く用ひ、年々  
よろしくて、かくもやうゆるとうのタとくとくとく  
多とあけて、いわくらへ  
かく書てはるうち

往古神鬼事也  
天降如何  
怪也  
御法  
相  
者  
萬物  
之生  
往古  
也

立知草  
天降お敷北是全國天王堂

恒徳寺本の後

源魚陸

浦内

神拂陽也  
語問不繁根  
草之植葉上良事  
神代美下云然之役也多者

量火光神及螺聲御神復

綱引了。吟。不

平祐

舉

者草木成能  
又云著有中國  
草章彌能詩詠

少福寺本の後  
萬葉歌

人半

人半

大中臣能宣  
安和元年大嘗會風俗

大中臣能宣  
安和元年大嘗會風俗

大中臣能宣

人半

在山之御事  
多福寺本の後  
年經て富士山と山

安和元年大嘗會風俗

大中臣能宣

人半

大中臣能宣  
安和元年大嘗會風俗

大中臣能宣

大中臣能宣

人半

大中臣能宣  
安和元年大嘗會風俗

大中臣能宣

大中臣能宣

人半

多福寺本の後

多福寺本の後

多福寺本の後

多福寺本の後

人半

天保五年大考合風往來年

天保六年大考合風往來年

山中高嶺山也代と並新了也

山中高嶺山也

山中高嶺山也代と並新了也

三手山

山中高嶺山也代と並新了也

山中高嶺山也

山中高嶺山也

山中高嶺山也

中勢

山中高嶺山也代と並新了也

山中高嶺山也

山中高嶺山也

万葉集  
人名表

愛

藤原忠房



